

ぷらすα

No. 97
2013・秋

環境に順応する

出居清太郎ワールドへのご招待2

二つで一つ

(1) 一つの行いをして、それがそのまま結末も見せずに行方不明になってしまうことはない。

(2) 世の中は矛盾した不公平なものとも考えられるが、徳の分量ということが各人に悟られるならば、なに一つ憤慨することもないのである。

(3) 環境に不平不満を持っている場合は、いつまでもその環境から卒業できない。

(4) 自分の天職は何であろうかと、思い迷う人もいるが、与えられた仕事を天職と思い、笑って働くことである。

(5) 水と魚、土と野菜 万物のいのちはずべて、二つが一つとなって現われている。これが天地自然の法則である。

(1) 太陽は東から出て西に没する。没してもまた必ず東から出てくる。これは地球が回転しているからであり、天地自然の秩序正しい法則である。これは太陽との関係を示されているだけでなく、われわれの行いにしても、行ったことは必ずかえつてくるといふ真理を示されている。善行も悪行も、必ずかえつてくる。一つの行いをして、それがそのまま結末も見せずに行方不明になってしまうことはない。

物が動けば、それはまわりに何らかの影響を与える、というのは物理学の世界では当たり前のことだろう。鍾乳洞やグラウンドキャニオンは、水の流れの、気の遠くなるような長い時間の影響によってできたのである。

私たちも、一言の言葉に傷つき、一つの行為によつて人を歓喜させることがあることを知っ

ている。深酒をすれば二日酔いになり、コツコツと練習を重ねることによつて、高い技術を習得できることも知っている。

しかし普通には、自分の行いの一つ一つ、出した言葉の一つ一つが、どこかに何かの影響を与えるとは考えない。また自分の身に何かが起きて、それは偶然に起きたのだと考えることが普通だ。

その時に、すべての事柄は、必然の流れの中で起きるのだ、と喝破(かっぱ)したのが聖者の悟りなのではないだろうか。

それは聖者の悟りだから、凡人にはそれが正しいかどうかわからない。正しいという証明はできない。しかし逆に、それが正しくないという証明もできないだろう。

そこで、すべての出来事は必然の流れの中にある、人の一つ一つの言動は、必ずそれに見合う結果に結びつく、すなわち、良い行いをすれ

ば良い結果が得られ、悪い行いをすれば悪い結果が出てくる、という見方に心を定めるならば、心は常に安定し、希望をもって自分を律しているのではないだろうか。

自分の身に何か不幸なことが起きた時も、これは起こるべくして起こったのだと思えば、動揺することなく、自然に受け入れることができるだろう。(第5項参照)

努力はいつかどこかで必ず報われると思えるならば、明るい気持ちでその努力を続けられるだろう。



カット 齋藤啓子

(2) 正直者がばかを見たとか、正直でまじめな人がなぜこんなに苦勞をするのかなどと良く聞く。また人から見るとは、傲慢無礼で、常識はずれで、不道徳な行いをしながら、物も豊かに、健康にも恵まれて生活している人も数多くある。世の中は矛盾した不公平なものとも考えられるが、徳の分量というところが各人に悟られるならば、なに一つ憤慨することもないのである。過去に徳を積み、徳を流したことにより、現在の徳の分量があるのだと悟られるならば、なんら矛盾も不公平もないことがわかるのである。

あんないい人なのに、不幸続きで気の毒だという人もいる。逆に、あんなに不真面目でいい加減なのに、いつもいい思いをして癪(しゃく)にさわるという人もいる。

そのことは、「すべては必然であり、良い行い

は良い結果に、悪い行いは悪い結果となって現われる」という見方をとることを躊躇させる。

そのとき聖者の目にうつったのは、現在の結果をもたらした原因となったものは、当人の行いの集積のみではなく、さらにまた現世での行いの集積のみではない、ということだった。

稼いだものの集積は遺産として、子や孫に引き継がれる。そこには負の遺産もある。同じように、行いの集積も、プラスもしくはマイナスの遺産として子孫に引き継がれる。行いの集積としての遺産が、(2)の文章では「徳の分量」という言葉で表現されている。

そしておそらく「徳の分量」に関しては、生物学上の先祖の影響よりも、当人の魂の過去世の影響の方が強いのだろう。しかしこのあたりのことは、聖者の悟りに属する事柄で、そうだという証明もできなければ、そうでないという証明もできないだろう。



ただ、すべては必然の流れの中にある、という見方を貫くとすれば、過去世までを視野に入れないければ、現在の世の中の不条理を心穏やかに受け入れることはできないだろう。

いかに不条理だと思っても、その現実がある以上、それに私たちは向き合わざるをえない。その時に、心穏やかに向き合うことができることは幸せなことなのではないだろうか。

(3) 環境に順応する それは無為無策のままなれてしまえということでない。そこに生き甲斐を感じ、歓喜を見いだしていくことである。ともかくも、その時その時の生き方に誠を凝結することである。すると思わぬ知恵がわいてくる。仕事の仕方にも人の意表をついた工夫が生まれってくる。

環境に不平不満を持っている場合は、いつまでもその環境から卒業できない。タラタラと日を送り、タラタラと一生を暮らしてしまう。一生懸命やるから卒業も早い。一つ卒業すると、また新しい環境に飛び込む。ここでもまた一生懸命にやる。おのずから卓抜した創意工夫が生まれて、これもまたたく間に卒業するというわけで、人生の展開が早い。こうなると仕事も面白いし、人生も楽しい。

(4) 自分の天職は何であろうかと、思い迷う人もいるが、与えられた仕事を天職と思い、笑って働くことである。与えられた環境の中でできるだけだけの努力をする。次に来るべき新しい環境は、自然にその功績として生まれてくる。

ある建築家が言っていた。新築の設計を頼まれて依頼者の家に行く。奥さんは言う。家が狭くて整理整頓ができない。今度収納スペースのある広い家になったら、ちゃんと整理するつもりだと。注文通り設計して建築した。しばらくして行ってみると、やっぱりちらかつていて、整頓されていない。そういう場合が多い、と。つまり、家が狭いことに不満をもっている奥さんは、家が広くなっても整理整頓ができない。環境のせいにはしていいのでは、いつまでたってもちらかった状態は解消できないだろう。つま

りちらかった状態から卒業できないということだ。

職場でも、自分の立場に不満をもっていけば、仕事に身が入らないだろうし、したがって成績もあがらないだろうから、いい立場に移ることもできないだろう。

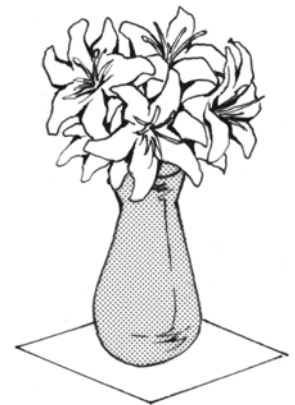
自分の置かれた環境は、自分にとって必然のものだと受け止めて、この環境の中でできる最善のことをやっていく。不利な条件であっても、それを逆に活かせないかと考える。そうすれば思わぬ成果が得られる。その結果で環境もまた変わってくるということになるだろう。つまり前の環境を卒業することになる。

雨の日、今日は天気が悪いとよく言う。ずっと前から楽しみにしていたハイキングの日に雨が降れば、「最悪ー」ということになるだろう。その時に、ふてくされていないで、よしちょうどいいから部屋の整理をしよう、御無沙汰の人

に手紙を書こう、ということにすれば、ああよかった、今日はいい日だったということになる。

その人にとって何が天職かということは、簡単にはわからないものだろう。そもそも一人一人に天職なるものが決まっているかどうか疑問ではないだろうか。

今の仕事を、自分に与えられた必然の環境と受け止めて、そこで最善の努力をする。そうすれば、その仕事を卒業して新しい仕事にめぐまれるだろう。天職というものがあるとしたら、そういうことの中で見つかるものなのではないだろうか。



(5) 人は空気の中に生かされている。その空気を呼吸して生きている。空気と命とは別々のものではない。一つで一つである。水と魚、土と野菜 万物のいのちはすべて、二つが一つとなって現われている。これが天地自然の法則である。

人に殴られ、蹴られたら、服装を正し、菓子折りの一つも持ってお礼に行くのを実行という。恩人と敵とは裏と表である。二つであつて、一つである。難有つて有難い。これもまた、表裏の関係にある。一つで一つである。

この世界は、「一つで一つ」という原理で成り立っている。これも聖者の悟りの一つだと思われる。

呼吸はまさにそうだろう。息を吸うばかりでは生きていけない。男と女、夫と妻、医者と患

者、先生と生徒、雇い主と従業員、売り手と買い手、などなど。また社会生活は基本的にギブアンドテイクで成り立っている。

その原理をいろんな場合に当てはめることができるようだ。子供のころ、親が倒産して借金取りに責め立てられた。それで学校に行けず、早く収入を得ようと芸能界に入った。そしてコメディアンとして成功した今の自分がある。昔、借金取りは敵だと思つたが、今になってみると恩人だ。という話を聞いたことがある。

それを思えば、厳しい上司に対しても、義理チョコではない、バレンタインのプレゼントができるかも知れない。介護する人とされる人も、二人で一つと思えば、お互いに気持ちのいい関係が築けるのではないだろうか。

私たちは指で物をつかむ。この時、指一本ではつかめない。親指がいかに強いといつても、親指一本では、紙一枚つかめない。もう一本の

編集後記

指と一緒になつてはじめて物がつかめる。会社も社長一人では成り立たない。やはり、「二つで一つ」と言えるだろう。

原因と結果の関係も、二つで一つの原理の表れともいえる。

「二つで一つ」この見方に立てば、いかなる場面に遭遇しても、動揺することなく、明るく、希望をもって、前進していけるのではないだろうか。



リニユール『ぷらす』の第2号をお届けします。

出居清太郎ワールドのご紹介第2弾です。

「人に殴られ、蹴られたら、服装を正し、菓子折りの一つも持ってお礼に行くのを実行という(第5項)など、聖者の言葉は時に強烈です。

しかし、自分の現実にあてはめて、どこか取り入れられるところがあるのではないでしょうか。本誌をお読みいただいた方同士で、感想などを話し合っていたけると有り難いことです。

本誌がお手元に届く頃には、秋になっていることを期待しつつ。

次号は来年3月1日発行です。(H・Y)

平成25年10月1日 ふゆのあり646号付録 ぷらす 平成25年秋号(通巻97号) 編集・発行人 山本博也
発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1 修養団捧誠会青少年担当 TEL03-39971-1493